

不適切な行動を示す知的障害養護学校児童の 自立活動におけるコミュニケーション指導の検討

滝口 直美

．問題

知的障害養護学校児童が示す不適切な行動の多くは、その場の環境や周りの人とのかかわりをもって生じており、何らかのコミュニケーション行動としての機能をもっていることが明らかにされている（藤原，2001）。この児童が示す不適切な行動のコミュニケーション機能を探ることにより、学校生活で必要としているコミュニケーション行動が見出され指導の目標と機会を特定することができると考えられる。

近年、不適切な行動に対して積極的行動支援（Positive Behavior Support，以下 PBS とする）と呼ばれるアプローチが主流になりつつある（平澤・藤原，2001）。佐田東(2001)によると、知的障害養護学校において不適切な行動を示す児童に対しては、特別な指導が必要であり自立活動で指導することが妥当だと考えられる。藤原（2001）は、PBS における機能的アセスメントは、自立活動における個別の指導計画の実態把握、指導目標の設定、その目標を達成するための指導の手だての立案という作業過程に重ね合わせることができ、具体的な方法論を提供してくれると述べている。

そこで、知的障害養護学校児童の不適切な行動に対する機能的アセスメントによるコミュニケーション指導の計画を、自立活動の個別の指導計画に用いることができると考えられる。そして、作成した指導計画をその学校現場の教育課程や教師の指導体制等に適合するように検討することが、実際の指導に結びつくものであると考えられる。よって、このコミュニケーション指導の計画を学校現場に適合するように検討していくことが日常的に活用できるものになると考え、実践事例を蓄積していく必要がある。

．目的

本研究では、知的障害養護学校において不適切

な行動を示す児童の自立活動におけるコミュニケーション指導のあり方を以下の点から検討した。

1. 機能的アセスメントに基づく自立活動におけるコミュニケーション指導計画を作成し、実践事例を具体的に示す。

2. 作成したコミュニケーション指導計画を実践し、活用効果を検討する。

．方法

1. 研究の参加者

1) 対象となる児童と教師：知的障害養護学校小学部 4 学年在籍の不適切な行動を示している自閉症男児 2 名とその学級担任 4 名であった。

2) 筆者の立場：情報収集および指導計画の立案を行った。実際の指導に当たっては、担当する教師が指導を行った。

2. 手続き

1) 事前アセスメント：対象児の個別の指導計画、機能的アセスメントインタビュー、直接観察を通して、不適切な行動に関する情報を収集し把握した。

2) 指導場面の選定：不適切な行動の生起頻度が高く、個別の指導時間が保障できる場面として、A 児は「朝の会」と「国語・算数」、B 児は「朝の会」と「自立活動」の場面を選定した。

3) 指導場面の詳細なアセスメント：不適切な行動の生起状況と機能推定を行い、サマリー仮説を作成した。

4) 指導計画の立案、適合性の検討：3)の結果を基に、不適切な行動のコミュニケーション機能と等価な代替行動の指導の方略を立案し、学級場面の環境設定に適合するかを担当と協議した。

A 児の「国語・算数」場面では、機能的アセスメントの結果、難度の高い課題や苦手な課題場面において回避機能を有すると考えられた不適切な行動の代替行動として『援助を要求する行動』を

指導した。また、課題の終了場面において、教師からの注目獲得機能を有すると考えられた不適切な行動の代替行動として、『報告する行動』を指導した。「朝の会」場面では、事物の獲得機能を有すると考えられる不適切な行動の代替行動として『挙手する行動』を指導した。

B 児の「自立活動」場面では、課題終了の場面において、課題からの逃避と次の課題物の獲得の 2 つの機能を有すると考えられる不適切な行動が生起していたため、その代替行動として言語以外のコミュニケーション手段として『活動終了を報告するサイン行動』を指導した。新規の課題や難度の高い課題場面からの逃避機能を有すると考えられる不適切な行動が生起し、その代替行動として、『援助を求めるサイン行動』を指導した。「朝の会」場面では、不適切な行動を示さなくともすむような環境設定、指導手続きを行い指導した。

5)指導実行プログラムの作成と実施、評価：作成した指導計画を基に実行可能なプログラムを担当と検討し作成した。ベースライン期、指導期(指導計画を評価、修正しながらステップに分けて指導)と構成し実施した。

6)事後評価：学級担任がどのように評価しているのかアンケート調査を実施した。

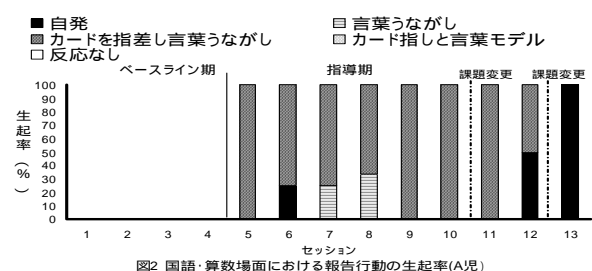
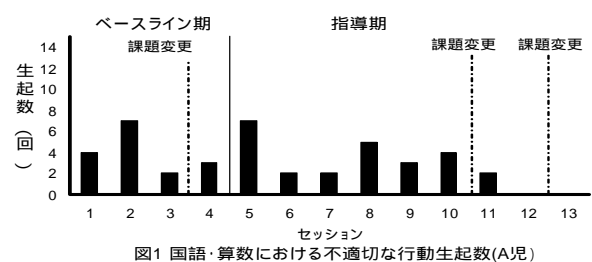
結果

1. 対象児 A:「国語・算数」場面では、代替行動が安定して生起してきたことと関連して、不適切な行動が減少した(図 1, 2)。「朝の会」場面では、アセスメントの結果から、不適切な行動が起こりやすい背景要因として新規の環境や学習場面があげられていた。やはり、指導期に入りステップ 1 では、不適切な行動の生起数が増加した。しかし、ステップ 2 において、指導計画に基づいて背景要因および直前のきっかけの方略と結果の方略の実施を徹底して行った。また、不適切な行動の代替行動として挙手する行動を指導した。その結果、挙手する行動が確実に生起するようになり、不適切な行動の生起数が減少した(図 3, 4)。

2. 対象児 B:「自立活動」場面では、代替行動である報告するサイン行動が安定して生起するよ

うになったが、不適切な行動の生起数は減少しなかった(図 5, 6)。援助を要求するサイン行動の指導は、2 セッション指導を行ったところ、そのセッションでは、担当教師の動作を模倣してサイン行動を表出した。しかし、結果事象として、B 児にとって有効な援助が得られなかったため、援助を要求するサイン行動が、B 児の不適切な行動と機能的に等価な行動とは成りえなかった。また、指導する教師にとっても実行に負担が生じた。そこで、その後のセッションでは、不適切な行動を示さなくともすむように、背景要因および直前のきっかけの方略を担当教師と協議し指導することとなった。課題の取り組みが理解できるような教材設定や写真カードの提示、指導の手続きを継続して指導したことにより、不適切な行動の生起数が減少傾向を示した。「朝の会」場面では、不適切な行動が減少し、生起しなかったセッションもあった。しかし、ステップ 2 では、ステップ 1 と比較して不適切な行動の生起数が増加した。長期欠席していた A 児の活動や教師の指導手続きが安定してくると、スムーズに朝の会の活動を遂行することができるようになり不適切な行動の生起数が減少した。また、コミュニケーション指導とした挙手する行動も確実に生起するようになった(図 7, 8)。

A 児は「言葉で自分の気持ちを伝える面で成長が見られた」と、B 児は「新しい課題にもしっかりと取り組むことができた」と担当教師が評価した。



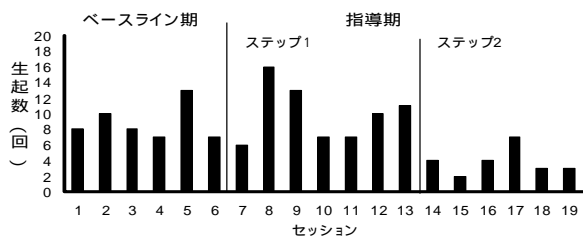


図3 朝の会における不適切な行動生起数(A児)

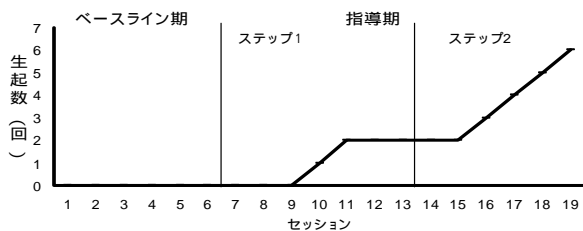


図4 「番号記入」における挙手行動の累積生起数(A児)

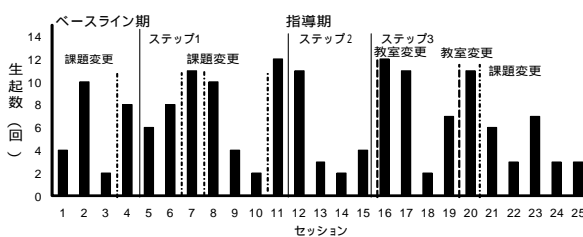


図5 自立活動における不適切な行動生起数(B児)

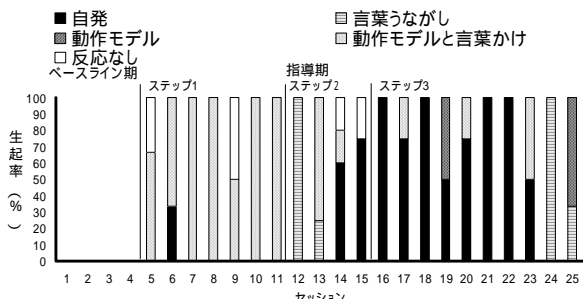


図6 自立活動におけるサイン報告の生起率(B児)

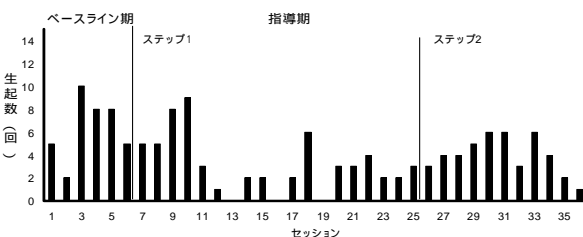


図7 朝の会における不適切な行動生起数(B児)

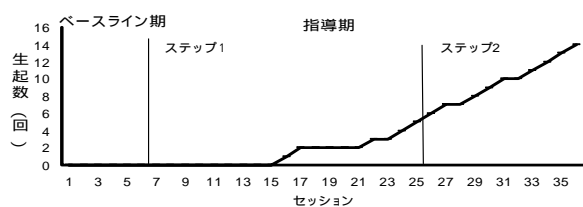


図8 「がんばるカード貼り」における挙手行動の累積生起数(B児)

考察

本研究の結果から、指導に携わる教師が指導計画を共通理解し、その指導の手続きが十分に実施

された場面では、A児、B児が適切なコミュニケーション行動を示すようになった。不適切な行動を示す児童への自立活動でのコミュニケーション指導のあり方として、指導にあたる教師と対象児の実行条件を十分にアセスメントした上で、1)機能的アセスメントに基づいた指導計画を作成し、2)その計画を実行可能にするプログラムの作成をするという2つの観点が重要であるということが示唆された。知的障害養護学校においては、自立活動を教育活動全般にわたって位置づけていることから、週時程に時間の指導を設定していない場合には、個別の指導計画の活用が難しいようである。機能的アセスメントに基づく指導計画の手続きを用いたことで、アセスメントから導いた客観的な目標を設定でき、指導の際の具体的な方略を立てることが可能になり、個別の指導計画の活用につながったと考えられた。また、複数教師で指導にあたることの多い知的障害養護学校においては、この指導計画および実行プログラムの活用が、担当教師だけでなく、他の教師が共通理解のもとに統一した指導を行う土台を提供するものとなったと考えられた。以上のことから、知的障害養護学校において、児童が示している不適切な行動の生起機会を、今その児童が必要としているコミュニケーションの機会として捉え、自立活動におけるコミュニケーション指導のひとつとして位置づけ指導することが有効であったと考えられた。

文献

平澤紀子・藤原義博(2001) 養護学校高等部生徒の複数の集会場面における奇声の改善 学校場面に適合した機能的アセスメントに基づく指導 . 教育実践学集/兵庫教育大学連合学校教育学研究, 2, 51-61.

藤原義博(2001) 子どもが示す行動の機能を分析する. 講座自閉症問題行動の理解と包括的な支援. 月刊実践障害児教育, 344, 46-49.

佐田東彰(2001) 知的障害養護学校に適合した不適切行動に対する機能的アセスメントに基づく包括的な支援計画の検討. 上越教育大学大学院修士論文.

